

## 認知症高齢者の社会関係の交差分析による量的・質的評価研究(1)

### －「暮らしの行為者」の視点からの哲学的アプローチ－

○ 熊本学園大学 黒木 邦 弘 (2757)

平塚良子 (大分大学大学院・1140)、橋本美枝子 (大分大学・2572)

滝口 真 (西九州大学・1862)、窄山 太 (関西大学・1499)

キーワード：認知症高齢者・エコマップ・社会関係

### 1. 研究目的

本研究は、認知症高齢者（当事者）の社会関係の性質を読み解くことにより、人間存在の実像に迫ることにある。その基本的な仮説は、たとえ「ぼけ」を伴っていても、当事者たちは「暮らしの行為者」として、「語り」をもって生きていることにある。

具体的には、特別養護老人ホームや通所施設等を利用する認知症高齢者の「暮らし」という「生の過程」を「社会関係の様態」として捉え、質的・量的評価を通じて認知症高齢者の医学モデル的人間観から「暮らしの行為者」モデル的人間観への転換、ないしケアの質的向上に寄与することを目指す。

本報告では、語りの60場面を捉え、これを「暮らしの中の語り」として位置づける。また、そこから見える本人なりの理屈、高齢者の主体性に関する基本的な特徴を明示することを試みる。この「暮らしの中の語り」は、認知症を伴っていても、当事者が主体として発し、安心して暮らしを構成する論理を読み解くことをさす。この読み解きにより、はじめて、「暮らしの行為者」として生の過程を生きる認知症高齢者の実存に添い、応答するケアが成り立つと考える。

### 2. 研究の視点および方法

#### (1) 研究の全体像・視点

本研究では、認知症高齢者の「暮らし」が「人間：環境」という社会関係において成り立つという観点から、①認知症高齢者本人（当事者）の発する「暮らしの中の語り」（暮らす行為）の分析を行い、利用者が多様な社会関係を生きる様（生態）を表す図式、②エコマップ(ecological pictorial-map)と、③その評価尺度を用いた関係を分析する方法をとる。すなわち、3つのタイプの分析方法を交差させることで、認知症高齢者の「暮らしの行為者」としての主体的人間像が明らかになるとともに、同高齢者が結ぶ社会関係全体の性質がより鮮明になる。このことは前述のような人間観の転換のみならず、認知症高齢者へのケア観の転換に結びつく。

本報告では、特に認知症高齢者の「暮らす」という能動的な行為に着目し、非言語的メッセージをも含む「暮らしの中の語り」を焦点化する。

## (2) 研究方法

### 1) 調査対象とデータ (全体)

調査先：入所施設・通所施設 (福岡・佐賀・大分県下の5法人)

調査数：30名 ※1名につき10場面 (別に予備2場面) = 300場面

調査期間：6ヶ月 (24週) ※一ヶ月当たり2場面

データ作成者：ケアワーカーとソーシャルワーカーによる共同作成

①「フェイスシート」の作成：当該高齢者の基本情報である。入所・通所施設の型、性別、年齢、要介護度及び認知症状、生活歴やADL及び意志疎通、経済的安定、家庭的安定、医療 (病気) の有無、文化・娯楽、こだわり等を記入する。

②データ提供時のデータセット

上記の基本情報とは別に、以下の三つのデータセットについて、現場と研究者・研究協力者のモニタリング方式により、調査データの精査を行う工夫をしている。

三つのデータセット：1「語りカード」、2エコマップ図、3エコマップ評価表

### 2) 今回の報告との関連性

本報告では、第一次報告として、研究の経過状況を踏まえ、基本情報を活用しながら、30名の「語りカード」2場面、計60場面から、認知症高齢者の「暮らしの中の語り」、「暮らしの行為者」像の抽出を試みる。

## 3. 倫理的配慮

本研究上の倫理的配慮については、日本社会福祉学会研究倫理指針に則り、事例を取り扱う。よって、研究協力者向けの説明会では、事例提供時に匿名を依頼し、学会報告に際してその確認を行った。また、認知症高齢者を抱える家族向けには、研究目的等を記した文書を作成し、配布し調査協力への理解を求めた。

## 4. 研究経過 (第一次結果) と考察

本研究では、「暮らしの行為者」としての認知症高齢者の姿を認めることができ、かつ、本研究のケアへの活用可能性を認めることができたが、それはあくまで語りの一部を取り出し、ある特徴を指摘するものである。30名の高齢者の多様な場面の全数を分析しているわけではない。したがって、「暮らしの行為者」像の詳細な分析には至っていない。今後は、①語りの全数の分析結果、さらには②エコマップを基にした社会関係の性質の解明、さらには③これらのクロス結果を明示することを課題としたい。

<詳細は、当日資料配布予定>

★本研究の協力者として、大隈ひとみ (大分大学)、下村恵美子 (宅老所よりあい)、池上恭世 (農協共済別府リハビリテーションセンター)、藤原有末 (大分大学大学院生) がいる。

★なお、本研究は、(財) 日本生命財団平成20年度高齢者実践的研究助成による。